





誰がいつ持ってきたのかはわからない。

気付いたとき、目の前にその食べ物があった。

男は空腹で今にも死にそうだった。

貧乏なその男は、もう何週間も飲まず食わずであり、

もって今日一日、今日が最期の日になるだろうと思われた。

餓死寸前の、そんなときである。

誰がいつ持てきたのかはわからない、目の前にその食べ物は置かれていた。

天使か、それとも悪魔がもってきたのか。

男にはわからなかったが、とにかく、今すぐにでも目の前にあるその美味しそうな食べ物を食べてしまひたかった。

しかし、その食べ物の隣には、「この食べ物には毒が入っています」という手紙が置かれていた。

男は考えた。

「これを食べるべきか、食べないべきか」

このまま何も食べなければ、私はいずれ餓死するだろう。

それに、この手紙は嘘かもしれない。

本当は毒など入っていなくて、誰かが私を騙そうといじわるをしただけかもしれない。

物陰から一匹のネズミがこちらを見つめていた。

食べ物を狙っているのだろう。

男は決めた。

「よし、食べよう。このまま何もしなかったらいずれ死ぬのだ。毒が入っていないと信じて食べてみるしかない。」

・・・

・・・

いや、ちょっと待てよ。

「もしも本当に毒が入っていたらどうしようか」

もし毒が入っていた場合、私はその毒によって死ぬ可能性がある。

いや、それでも「毒が入っていない可能性」にかけて、食べ物を食べ、

数日寿命を伸ばして誰かが助けに来る奇跡を待ったほうが助かる可能性はまだある。

いや、しかし・・・

男は悩んだ。

もう一度冷静になって考えてみた。

考えるべきは以下の三点だ。

- 食べ物に毒が入っていない可能性
- 食べ物に毒が入っている可能性
- 食べ物を無視して餓死する運命

どれを選ぼうか。

どの道を選ぼうか。

男は自分の人生について考えた。

『自分の人生は自分で決める』とは、どういう意味であろうか？

『生きたいという気持ち』とは、どういうことなのだろうか？

男の悩みは結局のところ、次のことである。

「最期をどのように迎えたいか。どのような最期が私にとって後悔のない選択であるか」ということ。

このことさえわかれば、自ずと選ぶべき道がみえてくる。



男は悩んだ。

しかし、悩んでも悩んでもその答えはでなかった。

気づけば太陽は夕陽に変わり、山の向こうに沈もうとしていた。

男の寿命が徐々に近づいてきた。

空腹はすでにピークを通り越していた

男は必死に考え続けた。必死に悩んだ。

「私はどう生きればよいのか、どのような最期が私にとって後悔がないのか」

男の顔に、涙と汗の混じった雫が流れた。

「わからない。俺は何ひとつ人生をわかっていないかったんだ。何一つ真剣に人生を考えてこなかったんだ。」

・・・

夕陽がなくなった。

空から光が消えた。

一日は終わりをつけた。

男はその場でゆっくり目を閉じ、目覚めることのない最期の眠りに落ちた。

眉間にシワを寄せたその表情は、苦しそうにも見えるし、

眠りながらもまだ何かを考えているようにも見えた。

あたりは静かな暗闇につつまれた。

物陰に隠れていたネズミがひょこりと顔を出し、一直線に食べ物へと向かって、男の隣を駆け抜けた。

最初からそのままの食べ物を一口、二口食べたあと、

しばらくして、ネズミは男の隣で同じように眠り、動かなくなった。